

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520787

研究課題名(和文) 明治期の日米文化交流史における来日アメリカン・ボード宣教師と同化の諸問題

研究課題名(英文) Assimilation and the ABCFM Missionaries in Meiji Japan: An Intercultural and Historical Examination

研究代表者

伊藤 豊 (Ito, Yutaka)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：40344775

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、異質な集団間の文化交渉における同化の問題を、日米文化交流史における来日アメリカン・ボード宣教師の事跡を具体的な分析対象としつつ、歴史的に探求することであった。科研費交付期間に実現した成果は、大きく分けて以下の3点である。(1) アメリカン・ボード来日宣教師に関する一次資料を収集した。(2) 同上テーマに関する二次資料を追加的に収集した。(3) 収集した資料の読解・分析をおこない、そうした作業を通じて得られた新たな知見と成果を、論文・学会発表の形で公表した。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research was to pursue historical investigation on the process of assimilation between culturally heterogeneous groups. In exploring this question, my research focus was on the ABCFM missionaries and their activities in Meiji Japan. The following three goals, which I had specifically established at the beginning of this project, were attained at the end: (1) To collect primary and secondary source material regarding the ABCFM's activities in Japan, (2) to analyze the collected material from my original viewpoint, and (3) incorporate my research results and new findings into my publication as well as conference presentations.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：文化交流史 来日宣教師 明治時代 同化 ABCFM

1. 研究開始当初の背景

私は平成20～22年度に科研費を受給しつつ、アーネスト・F・フェノロサの事跡を伝記的に検証し、また彼が日米文化交流史上で果たした役割を解明することに努めた。明治日本におけるアメリカ出身の御雇外国人であったフェノロサは、帰国後は東西文明の融合を唱道するユニークな思想家として、同時代人の間で相当の知名度を博することになる。フェノロサはアメリカそして広義には西洋文明にとって文化的に異質な存在である東洋、ならびにその精神的精髓を具現した日本美術を宣揚し、また日本美術を含む極東アジア文化の様々な成果を、彼一流の解釈を加えつつアメリカへと積極的に紹介した。フェノロサはこのような活動によって、ともすれば物質主義に流れがちなアメリカ社会の風潮に警鐘を鳴らし続けたわけだが、日本や東洋を含む文化的「他者」の意義をめぐっては、世紀転換期のアメリカにおける解釈も一様ではなく、したがってフェノロサが持論を開陳した際には、他の知識人との間で単なる見解の相違にとどまらない対立が観察されることもあった。

フェノロサに関して上記のような研究をおこなう過程では、彼の生涯に関連した人物や出来事についても種々調査することになったが、私はそうした調査を通じて、文化的に異質な「他者」との接触は、互いの存在をめぐる差異の認識（の深化）に、必ずしもつながるものではないことを、しばしば確認するに至った。例えば少数派集団の有した元来の文化的差異が、多数派集団との交流を通じて消滅あるいは多数派の文化に順応していく場合も、歴史上には非常に多く見られるのである。このような「文化的同化」の問題を、日米文化交流史という枠組みの内部で敷衍すれば、それは以下のようなものとなる。すなわち、幕末から明治期にかけて、日本とアメリカは互いを文化的他者として認識し続けたものの、一方でそうした認識は様々な次元での人々の実際の交流を通じて、しばしば元の形とは異なるものへと変化していった。さらに来日アメリカ人に関して言えば、彼らの多くは西洋先進文明を伝えるべく来日したものの、やがてこのような役割と並行しつつ、日本的（つまり彼らにとって文化的に異質）な価値を多少なりとも許容していき、あるいは積極的に称揚する者すら登場した。

私がこうした問題を特に意識するようになったのは、明治期の有力な来日宣教師団体であるアメリカン・ボードの書簡について、以前に研究する機会を得た時からである。明治期の日本人にとって、宣教師はもちろん文化的他者の最たるものであり、また宣教師の側でも、自身がキリスト教という文明や進歩を体現しているという自覚は、根強いものがあつた。ただしキリスト教という最も西洋的かつ確立された宗教文化を代表する彼らですら、その文化的他者性をそのまま保持する

ことはできなかつた。結果として彼らの多くは日本の生活習慣へと同化し、またそうした習慣の背景であるところの、諸々の非西洋的な価値観や文化を多少なりとも受容していったのである。

2. 研究の目的

みずからが当初は他者として移り住んだ社会の慣習や規範を容認し、さらにはそれを我がものとしていくといった類の文化的同化の問題は、差異や多様性に焦点を絞るといふ、従来の文化研究の多くに見られがちな方針によっては、十分に究明され得ない。このような問題意識を背景としつつ、本研究が当初の目的としたのは、文化集団間の交流における同化の問題を、明治期の来日アメリカン・ボード宣教師の事跡を主要な分析対象としつつ、日米文化交流史の文脈で考察することであつた。科研費の交付期間内で実現を目指した具体的な目標としては、(1)アメリカン・ボード来日宣教師に関する一次資料の収集、(2)同上テーマに関する二次資料の収集、(3)資料の読解や分析を通じて得られた成果の公表、の3点が挙げられる。

3. 研究の方法

前述の研究目的のうち、(1)と(2)については、文献資料の検索・収集・分析を科研費交付期間を通じて継続的に実施した。ウェブ上のデータベースをおもに利用して、本研究に有意な一次・二次資料を検索・一覧化した後、資料の収集をおこなった。同時に、研究テーマに関する包括的な一次資料集である「アメリカ外国伝道委員会記録文書集」（マイクロフィルム）を購入し、読解・分析を進めた。また平成24年3月にはアメリカ合衆国ボストンのCongregational Libraryにおいて、日本では入手不能な一次・二次資料の調査・収集を実施した。またその他の関連資料については従来から継続的に収集中であつたが、本研究期間中に相当数の図書を購入することで、いっそうの量的・質的充実を達成することができた。このようにして集めた資料を整理・分析していく作業については、その整理をアルバイト人員の手を借りつつ進め、あわせて資料の読解ならびに必要な部分の翻訳作業を実施しつつ、対象資料の時代的な背景分析と歴史的な位置づけ作業をおこなった。また(3)については、所属学会での発表や勤務先大学の学術雑誌に寄稿することによって、研究成果を公表した。

4. 研究成果

研究目的として当初に設定した、アメリカン・ボード来日宣教師に関する一次資料の収集、および同上テーマに関する二次資料の追加的収集については、これまで取り組んできたアメリカン・ボード日本ミッション文書の分類整理がいちおう完成し、文書本体に詳細なインデックスを付加した形で、同志社大学

人文科学研究所に返却することができた（私はこの功績により、第 21 回新島研究論文賞〔2013 年度〕を受賞した。これについては、〔その他〕の項目の URL を参照）。また、その他の一次・二次文献の収集も順調に進捗し、自身の今後の研究にとって必須となる基盤を構築した。

アメリカン・ボードに関する先行研究の大部分は、おもに日本のキリスト教史という文脈でなされたものである。日米文化交流史における同化の問題としてこの主題を取り扱おうとする私の研究は、着想の点ではユニークなものであったと自負している。また資料の読解や分析を通じて得られた成果については、学会発表や論文を通じた情報発信をおこなうことで、来日宣教師の思想と行動をキリスト教史という枠組みを越えて検討するための視点を提起し、当分野における今後の研究に多少なりとも資するものがあつたと思う。現在、来日アメリカン・ボード宣教師の事跡に関する一次資料の発掘・研究は、それなりの質的充実を見せているものの、宣教師の書簡等の文書の読み解きに直接携わっている研究者は、今のところ少数に限られており、また来日宣教師の思想と行動をキリスト教史という枠組みを越えて検討しようとする試みも、依然として極めて不十分な段階にとどまっている。本研究はこうした研究上の欠点を補完することを目指したが、その進捗は概して緩やかであつて、科研費交付期間内の成果としては、論文 1 本と学会発表 3 件を何とか実現しえたにすぎない。

本研究にて論文の形で公開できた成果は、来日宣教師の文化的同化の（対立的な意味での）前提となるところの、R・アンダーソン（Rufus ANDERSON, 1796-1880）の思想の素描と、その意義の検討であつた。アンダーソンは 1830-60 年代を通じて、長年にわたりアメリカン・ボードの海外担当幹事の任にあつた人物であり、強力なリーダーシップによって同団体の当時の海外宣教方針を規定し続けた人物でもある。拙稿で検討したアンダーソンの思想とは、宣教と文明化の関係をめぐって展開されたものである。宣教師は直接的な宗教活動に集中すべきであり、したがって従来から海外宣教に付随して進められてきた、学校経営や出版などの文明化の事業からは人員と資金を引き上げるべし、というのがアンダーソンの主張であつた。こうした方針にもかかわらず、宣教師の相当数は文明化の使命に忠実であり続け、結果として宣教と文明化という二つの使命に引き裂かれた彼らは、やがて赴任地において、もっぱら文明化の使徒として現地に同化して生きることを選ぶに至る——このような問題意識に立脚しつつ、文化的同化の問題を来日アメリカン・ボード宣教師の事例に即して検討することが、論文執筆の当初の意図であつたが、本稿ではそこまでの問題を十分にカバーするに至らず、論文結論部にて問題点と今後の課

題を指摘するにとどまつた。

学会発表については、その 2 つがアンダーソンの思想を対象とするものであり、残りの 1 つは、今回の研究プロジェクトから派生した問題を扱つたものである。発表①は前述の論文と対をなしており、この発表に大幅な加筆修正をする形で論文化がなされた。発表②ではいわゆる自給教会論を中心とするアンダーソンの議論をまず分析した。自給教会とはアメリカン・ボードが海外布教に際して採用した原則の一つである。宣教師は布教をおこなう海外現地において、当初は教会の設立・維持や信者組織の運営に主役としてあたるものの、赴任地での布教が外部からの支援なしでも持続発展しようと判断された時点で、教会をその地の牧師や信者へと委ねるべきであるとされた。母体となる宣教師団体からの、現地人を中心とした教会の自立を、上記のような形で実現するに際して最も重要だと考えられたのは、信者の浄財による個々の教会の経済基盤の確立であり、これが自給教会の原則であつた。こうした自給教会論をアメリカン・ボード内で主唱したのがアンダーソンである。アンダーソンの自給論は、アメリカン・ボードに所属する宣教師の間で広範な影響力を有することになるものの、一方で海外現地での布教活動が緒に就いたばかりの、いまだ十分な数の信者を獲得していない教会にとっては、母体である宣教師団体からの財政援助が必須と考えられてきたことも事実であり、したがって原理原則としての自給教会論は海外布教の現場において、しばしば論争の種となつた。

本発表では、アメリカン・ボードにおける自給教会論の源泉としてのアンダーソンの議論を辿りつつ、それが海外布教の現場にどのような影響や葛藤をもたらしたかについて、最終的に日本の事例を分析の対象として、外来思想の土着化と同化との観点から考察した。本発表に対しては、聴衆からいくつかの傾聴すべき意見が寄せられ、それらを包摂するような形の論文を、現在鋭意準備中である。また発表③は、東北地方に長年住んだ宣教師が、災害をどのように捉え、その情報を本国に伝えたかという問題を扱つた。同化の問題からすれば本論からは外れるものの、本研究の過程で発見した資料を用いた発表であるという点で、一つの派生的な成果であると捉えられる。

研究開始にあたって設定した目標と実際の成果を比べてみれば、まだまだ道半ばの観があることは否めない。今後も一層の継続的な調査と考察が必要とされるわけであり、したがって本プロジェクトは今後の私のアメリカン・ボード研究にとって、極めて重要な基礎になつたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①伊藤 豊、宣教と文明化：R・アンダーソンの戦略、山形大学人文学部研究年報、第11号、査読有、2014、87-105
http://www-h.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/pdf/nenpou11_06.pdf

〔学会発表〕（計 3件）

①伊藤 豊、宣教と文明化 —R・アンダーソンの戦略—、日本比較文学会 2013 年度東北大会、2013 年 11 月 30 日、カレッジプラザ（秋田市）

②伊藤 豊、アメリカン・ボードと自給教会論、日本比較文化学会 関東（第 35 回）・東北合同支部例会、2013 年 09 月 28 日、東京未来大学

③伊藤 豊、カタストロフィの地としての「東北」 —英語圏におけるそのイメージをめぐる—、日本比較文学会北海道支部・東北支部共催 比較文学研究会、2012 年 3 月 17 日、北海学園大学豊平キャンパス

〔その他〕

第 21 回新島研究論文賞〔2013 年度〕URL：
archives.doshisha.ac.jp/essay/award.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 豊 (ITO, Yutaka)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：40344775